



ちひろと俳句 同時展示：ちひろと一茶

●2008年5月14日(水)～7月13日(日)

協力：一茶記念館

俳句は「五・七・五」という世界でも類のない最も短い形式の詩です。わずかに17音でつづられる俳句は、句を読む人によってさまざまな解釈が可能で、そこに興行が生まれます。「自分の絵は俳句に似ている」と語っていたいわさきちひろ。説明的な要素を省いて、余白を生かしたちひろの絵もまた、見る人の想像力にゆだねられています。何も描かれていない余白の部分に人は色々な場面を想像し、絵のなかの子どもたちの姿に、小さい頃の思い出や自分の子どもの姿といったものを重ね合わせることができるのです。

ちひろは絵本の仕事でも、俳句のような短い言葉と絵で心情を豊かに伝える、新たな取り組みに挑戦しています。

今回は、季節感あふれるちひろの作品を、俳句や季語とあわせて展示するほか、俳句のような絵本づくりの試みから『ことりのくるひ』(図6)を紹介します。

ちひろの歳時記—季節を彩るもの

俳句の季語を集めた歳時記には、季節の美しい言葉がたくさん収められています。風に関する季語なら「春一番」「春疾風」、春の光のなかをそよぐ風を「風光る」、新緑の季節に吹くのは「若葉風」、木々の葉を裏返すように吹く強い風を「青嵐」。風の吹く時期やその強さの微妙な違いによって、きめ細やかに季語を使い分けています。多彩な季語には、日本人の自然や季節に対するものの見方、微妙な違いを楽しむ柔らかな感性といったものが表れています。

ちひろもまた身近な自然を愛し、季節によって変化していく光や風の表情を、繊細な感覚で絵に描き出しました。

「緑の風のなかで」(表紙)では爽やかな新緑の風を、「紫の雨のなかの少女」(図1)では雨にしっかりと濡れた大気を描き、「入道雲」(図2)では空に湧き上がる夏の雲を勢いよく表現しています。それぞれに「風薫る」「五月雨」「雲の峰」といった夏の季語を思い起こさせます。光や風、雨や雲の変化が美しい夏の季節、ちひろは夕焼け空も好んで描いていますが、「夕焼け」も夏の季語です。

他の季節の絵のなかにも、ちひろが好んで用いた季節のモチーフを見つけることができます。秋は美しく色づいた葉っぱや風に舞う枯れ葉(図3)、りんごやぶどうなどの果物や木の実。自然界に色が少ない冬は、セーターやマフラー、手袋や毛糸の帽子など雪景色に映えるカラフルな子どもの服や小物。春は、芽吹きの萌黄や色とりどりの花々や蝶(図4・5)。

こうした作品の多くは「子どものしあわせ」「こどものせかい」など月刊誌の表紙絵や、カレンダーに使われたものです。描かれている季節のモチーフは、ちひろが身近な自然や暮らしのなかで見つけた季節のしるしであり、小さな感動の記録ともいえるでしょう。季語をキーワードに、日々の喜びや発見を詠み込んでいく俳句にも似ています。絵のなかにある季語を探しながら、それぞれに歳時記を編むのも楽しいことかもしれません。

同時展示 **ちひろと一茶**

ちひろの父親が俳号を「梓月」と称して郷里の松本で句会を開いたりしたこともあって、ちひろにとって俳句は身近なものでした。とくに信州の俳人・小林一茶を愛し、一茶の句にあるユーモアと反骨精神、小さなものを見つめる優しさが好きだと語っていたといえます。1966年、ちひろは黒姫高原に山荘を建てますが、決めた理由のひとつには、一茶の里である柏原に近いということもありました。山荘には「やせ蛙負けるな一茶是にあり」の拓本の軸物が飾られていました。

一茶は、ほかにも「青梅に手をかけて寝る蛙かな」「ゆうぜんとして山を見る蛙かな」など蛙の句をたくさん詠んだことで有名ですが、そのほか猫や犬、雀、蝶やトンボ、果ては蚊や蚤にいたるまで、小さな生き物たちの姿を優しくユーモラスにとらえました。

54歳にして子どもを得てからは、我が子の愛らしい仕草や親の願いを句に詠んでいます。「這へ笑へ二ツになるぞけさからは」小さな生命に寄り添い、かわいと思うものを心からいとおしむ一茶の俳句は、あかちゃんや子どもを生涯のテーマとしたちひろの絵の世界とも通じています。同時展示では、小林一茶の句とともに、子どもや小さいものへの愛情や信州の自然が感じられるちひろの作品を展示します。時代を超えて愛される俳人一茶と、画家ちひろの異なる個性の響きあいをお楽しみください。(山田実穂)

●多目的展示ホール

<企画展>ちひろ美術館コレクション展Ⅱ 絵本どうぶつ百態

●2008年5月14日(水)～7月13日(日)

ちひろ美術館コレクション展の第2弾では、世界各国の絵本画家が趣向を凝らして描いた動物たちを紹介します。

いたずらっぽい目をしたリス(図1)は、森に生きるリスの生態を描いたワイルドミス(イギリス)の絵本『りすのはなし』の一場面です。ふさふさした大きなしっぽと丈夫な後ろ足は、ヨーロッパに生息するキタリスの特徴をよく表しています。リスの鮮やかなオレンジの毛並みや、万華鏡を透かして見たような木の表現にも注目してください。ワイルドミスの動物絵本では、動物の的確な描写とともに、水彩絵の具やアクリル、パステル、鉛筆などの画材を駆使した華麗な色彩が見る人を魅了します。

真剣な眼差しで絵を描いている気難しそうなゾウ(図3)は、ヴィルコン(ポーランド)がドイツ語の詩の絵本 *Die Tiergerin Trägt Hermelin* のために描いたものです。この本には、フランスの名優ジャン・ギャバンに似たサイヤ、画家自身にそっくりなライオンなど、擬人化された動物たちが次々に登場します。幼いころからさまざまな動物たちといっしょに暮らしてきた彼の絵には、動物への親しみとユーモアがあふれています。ヴィルコンはライフワークとして、木や金属を用いた動物の立体作品も制作しています。安曇野ちひろ美術館では天井を泳ぐ魚などでおなじみですが、今回、東京館では初めて「ドアの前の犬」を展示します。

ハナーク(チェコ)は、水彩絵の具のにじみや筆の線を駆使して、野性的な動物の肢体を巧みに表現しています(図4)。釣りや狩猟を好み、自然のなかで過ごす時間の多かった彼は、ほとんど記憶だけで動物たちを描いたといえます。

他にも、ローベル(アメリカ)のトラやラチョフ(ロシア)のキツネ、中谷千代子のヤギや長新太のオラウータンなどを展示します。絵本のなかで動物は、ときには自然界の仕組みを教える存在として、ときには子どもたちの友だちとして登場します。各国の自然や文化の違い、画家の個性によってもさまざまな姿で描き出される動物たちをご覧ください。

(上島史子)



図1 紫の雨のなかの少女 1971年



図2 入道雲 1973年



図3 枯葉と赤い服の少女 1971年

夏の季語 風薫る 五月雨 青時雨 雲の峰 虹 夕焼け 夏休み 麦わら帽子
日傘 水着 日焼け 夏草 あやめ 紫陽花 ひまわり



図4 水仙とつくしを見る子ども 1960年代後半



図5 わらびを持つ少女 1972年



図6 『ことりのくるひ』より 小鳥と少女 1971年



図7 蝶とあかちゃん 1971年

庭の蝶子が這へば飛び這へば飛ぶ
小林一茶

春季季語 春の野 子猫 ひばり 蝶 つくし わらび 桜 藤
チューリップ 菜の花 ねぎぼうず すみれ

小林一茶 (こばやし・いっさ) (1763~1827)

江戸時代を代表する俳諧師の一人。北国街道柏原宿(現信濃町)の農家に生まれる。20歳を過ぎたころから、俳句の道をめざす。30歳から36歳まで俳諧の修行のため近畿・四国・九州を歴遊、50歳で柏原に戻る。代表的な句集に「おらが春」など。

多目的展示ホール



図1 フライアン・ワイルドスミス (イギリス) 『りすのはなし』より 1974年



図2 シビル・ウェッタシンハ (スリランカ) 『かさどろぼう』より 1986年



図3 ユゼフ・ヴィルコン (ポーランド) 『イタチの襟巻をしたトラ』習作 1993年

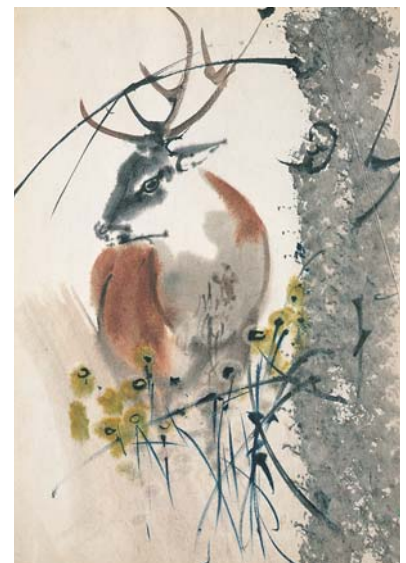


図4 ミルコ・ハナーク (チェコ) 鹿 1969年頃

ちひろ生誕90年記念トーク

3月30日(日) 蔵富千鶴子「ちひろの絵本づくり」 聞き手：松本猛

(元・至光社編集者)

松本：蔵富さんが母のアトリエにお出でになったのはいつごろからでしょうか。

蔵富：1965年か66年ころだと思います。20代半ばの、至光社で働き始めて間もないときで、はじめは武市八十雄氏についてお聞きがいました。

松本：僕が高校生になるころですね。

蔵富：ちひろ先生には1958年から「こどものせかい」という月刊の絵雑誌でお仕事をさせていただいていました。表紙にも3度登場して下さったんです。最初のときは小さい絵の周囲を額縁のように飾った表紙で、次が表紙の切り抜きから絵がのぞくスタイル(図1)。

松本：表紙の窓からのぞいているときと、めくったときとの意外性を考えながら描いていますね。表紙の制約がなければ、この構図は考えなかったと思います。

蔵富：3回目よきの表紙は、画面いっぱいに描いた絵の断ち落としスタイル(図2)。これも1年間続きました。それまでは出来上がった絵を頂戴に上がっていました



図1 「こどものせかい」1966年2月号表紙
右は表紙をめくった状態

図2 「こどものせかい」
1972年5月号

たが、このときは表紙を描いてくださる日に、お宅にうかがいました。10時に玄関に着くと、先生は制作用のエプロン姿で迎えてくださって、最初はひとまず机の整理をなさりながら、いろんな話をされるんです。例えば、猛さんの進学のことなども。このころはお手伝いの方もいましたが、双方のお母様が同居されて、旦那様も衆議院議員になられて忙しくされていて、なかなか日常は集中するのが難しいということもおっしゃっていました。和服の生地で作ったお洋服を見せていただいたこともあります。そのうちお昼になって。

松本：10時から始まって、ほとんどお昼ぐらいまでは、なにもしないんですね。

蔵富：でも、その時間がきっと先生には大事だったんだと思うんです。お昼に親子どんぶりなどをご馳走になって、1時過ぎごろから、紙をテーブルにお出しになって、「何を描こうかしら」と。季節の花だとか、子どもたちの話をしながら、あるときさらさらって、筆を動かされて。たいがい子どもの頭とか顔の輪郭から始まって、後はもう集中なさってどんどん描かれるので、私はお待ちすればよかったんです。3時半か4時ごろには1枚の絵が出来上がりました。私がお昼の日にちゃんと会

社に戻って絵を置いて帰れる時間を計算して下さっていたと思うんです。「今日は駄目だからこれで」ということは一度もありませんでした。おしゃべりしている時間も、整理している時間も、先生は着々と、どういうものを描こうかと考えていらしたのではないのでしょうか。

松本：描く順番は、僕の記憶では目が最後だった気がするんですけど。

蔵富：やはりちゃんと乾いてから、目をお入れになったと思います。左手で塗っては、右手でドライヤーを使って絵の具の水気を動かしたり、乾かしたりしていかれるんですよ。うれしそうにね、「このドライヤーは猛のよ。」なんておっしゃって。お道具といえば、鏡もございましたね。鏡でよく手の形を確かめていらっやいました。「私のなかには、たくさんの子供がいるの。『○○ちゃんの番よ』」というと、筆の先から出てくるのよね。」ともおっしゃっていました。それはもう、一種の魔法のようでした。その魔法を傍で見せていただいた、幸運なものひとりだったと思っています。(上島史子)



4月6日(日) 松本善明×松本猛対談「ちひろを語る」

(いわさきちひろ記念事業財団副理事長)

「ちひろさんをとても身近に感じました」「語り尽くせぬお話、楽しかったです」ちひろの夫・松本善明と一人息子の松本猛による、笑いあり涙ありの1時間のトークを抜粋してお伝えします。

猛：新婚時代は六畳一間のブリキ屋さんの2階で暮らしていたんだよね。

善明：当時は、相当貧乏だったからね。

猛：結婚誓約書には「健康的な生活をする事」「お互いの立場を尊重し、特に芸術家としての妻の立場を尊重すること」「建設的な財政を実行すること」「土曜日に以上の事を点検すること」とあるけど、点検はしたの？

善明：しなかった。(笑) まあ、浪費しないでやっということだから。若かったからこんなことまで入れたんだけど、中心は人生の目標をはっきりさせて生きていこうということだった。

猛：窓からラーメンを買ったと言っていたけど、2階の窓から？

善明：階段を下りて裏口から出て行く間にラーメン屋さんが行っちゃうから、かごに綱をつけ、鍋とお金を入れて窓からぶら下げてそこへ入れてくれと。

猛：夜鳴きソバで、屋台を引っ張って来

るところに、上から声をかける。

善明：窓から「ちょっと」と手を上げて。

猛：なんだか楽しそうだな。だけど僕はここには2ヶ月住んだだけで、信州の祖父母に預けられます。本当はどうだったの？要するに、お袋がギブアップして僕を信州に預けたのか、信州のおじいちゃんおばあちゃんが見るに見かねて僕を引き取ってくれたのか。

善明：側からみても、仕事がたくさんで、とても子育ては不可能だった。生まれたばかりの時は、母乳をあげたりして離すわけにはいかないけれど、離せる状態になったら、どちらが言い出したかそこまではわからないけど、あちらへ行くことになったね。

猛：一年後、晴れてここ上井草に家族三人で暮らし始めます。当時の日記を見ると、家具屋に払えないとか、歯医者にお金がかかるとか、色々書いてある。

善明：でもそれは一時期のことだね。そういうのは、亡くなった後で知って、そうだったのか、と思うね。

猛：幸せな夫ですよ。

善明：ある日、みんなあなたが悪いのよ

と。こちらは朝早く出て夜遅く帰ってきたばかりで、なぜ僕が悪いんだ？と言うと、それで一緒に笑って終わりになった。今から思うと、色々な苦勞が皆自分にかかってくる、少しは分担してくれ、ということだったろうと思うね。

猛：亡くなる半年前、『赤い蠟燭と人魚』を描くためにお袋は新潟の虫生海岸に行っている。亡くなってから親父とそこを訪ねたんだよね。

善明：海岸の裏に小さな祠があり、ちひろが絵に描いた祠と、全く同じ。これは写生したのって編集者に聞くと、宿から一歩もでなかったと。ちひろの想像力のすごいところだなあ。

猛：親父はどんな絵を見せても、君はすごい、天才だと言っていたんだよね。

善明：私自身は、絵を描けないと思いこんでいた。それは当時の教育のせい。今は、絵は自分の気持ちで描くもので、うまい下手は関係ないとわかる。そういう教育が、今、必要だと。ちひろとも、そんな話をするのがあったら、ちひろももっと長生きできたかもしれないなあ。

(西尾ゆう子)

ひとこと ふたこと みこと



3月1日(土)

午前中までゆっくり寝て、昼から寄らせていただきました。普段、インターネットの中で仕事をしている私にとって、すべてが新鮮に思えました。ネットの世界ではなく、リアルな世界の本当の良さがここにはありました。

3月23日(日)

水彩のやわらかな優しい絵が、とても今の気分と調和し、ゆっくり素敵なお休日を過ごすことができました。桜のほのかなピンクの咲き始めた今日は春日和。(阿部真弓)

3月26日(水)

ちひろさんの生きてらした年月には、戦争がありました。なのに、こんなにも幸せあふれる絵の数々…。平和を願ってこそこの絵ばかりですね。子どもたちに平和な日々

を、ただそれだけを思って描かれていたのかと思うと、身の引きしまる思いもします。また子育て頑張れます。(3太郎の母)

3月28日(金)

「絵本美術館の仕事を体験してみよう」という引率で来館しました。参加した若者が大きな感動を得たのはもとより、イベントの企画側の人間として、職員、スタッフの方々の姿勢に感動し、また感謝しています。作品が伝えようとしているものを、本当に深いところで大切に、それをお客様に伝えることの価値を、体験学習の中高生にきちんと理解してもらおうとする、その姿勢、スピリットが本当に有難いと思いました。(AKI)

3月30日(日)

青森から来ました。長年の夢だっ

たちひろ美術館に、親元を離れ一人で生活する娘と共に来ることが出来ました。保育士生活20数年、何度も絵本で親しんだちひろさんの絵に、あふれる想いです。一人生活を始める娘へ、一つ優しさをプレゼントできたのではと思います。ちひろさんの絵を見て感じる思いを大切に頑張ってください。

<ロシアの絵本展感想ノート>

4月2日(水)

ロシアの絵本はスゴイ！パワーが満ちあふれている感じがです。『てぶくろ』は原画が見られるなんて、幸せです。ユーモアにあふれていて、目が話せない。隅々までいないに描かれた絵たち。色使いのセンスの良さと細かい模様なんて、お洋服にしたいくらい素敵ですね。勉強になりました。(愛29才)

美術館 日記



3月9日(日) ☀

春は出発の時。3名のアルバイトスタッフが社会人になり美術館から旅立つ。そして新たに加わったメンバー10名が、緊張した面持ちで、日々研修に取り組んでいる。

3月19日(水) ☁

下石神井小学校をこの春卒業する子どもたちが、美術館見学のお礼にと栽培委員が育てた桜草の鉢植えを持って訪ねてきてくれた。桜草はちひろの庭へ仲間入り。

3月23日(日) ☀

丸善丸の内本店で3週間、ちひろのコーナーを作ってくれることに。ショウウィンドーには複製画12点が飾られる。閉店後の夜9時から飾り付け作業を行った。

3月24日(月) ☁

1956年に制作され、数々の映画賞に輝いたラモリス作『赤い風船』。

ちひろはこの映画を見て絵本化を思い立ち、絵本『あかいふうせん』を描いた。この映画がデジタル化され、7月から日本で公開されることに。ちひろ美術館では、秋に『あかいふうせん』の絵本原画の展示が決まっていたこともあり、ぜひ協力して広報していきたいと、映画鑑賞券と美術館の入館券をセットした特別チケットの発売が決まる。

3月27日(木) ☀

二日間にわたり6名の高校生・中学生がちひろ美術館で職場体験。「美術館の仕事を体験しよう」という北区の企画によるもの。受付に始まり、駆け足ながら館のさまざまな仕事を体験してもらった。

3月31日(日) ☀

トークイベント「ちひろの絵本づくり」開催 (p4 参照)

4月3日(木) ☀

東京都美術館・博物館61施設の共通入場券「ぐるっとパス」。今年ちひろ美術館も参加館になった。今日パスで来館された方の中には、4月1日スタートながら、すでにここが4館目という方も。美術館ではパスの販売も行う。様々な美術館に足を運ぶきっかけとなる、楽しい取り組みに。

4月6日(日) ☀

対談「ちひろを語る」開催 (p4 参照)

4月10日(木) ☁

山口県立美術館で4月17日から開催される「いわさきちひろ展 - ようこそ！ちひろの家へ」で、昨年初秋東京館で制作展示された、初期アトリエの復元が公開される。今日美術館担当者立ち会いのもと、倉庫から山口へ無事搬出された。

窓

『花の夢—ある中国残留婦人—』

松本由理子 (ちひろ美術館・東京 副館長)

隣町で、映画「花の夢」の上映会が行われ、主人公である栗原貞子さん、次女の優子さんと舞台上で話させていただいた。

美術館でも話していただいたことのある栗原さんは、ちひろが敗戦の前年の1944年、ソ連との国境地帯に近い「満州」勃利(現中国黒龍江省)に女子義勇隊員の花嫁修業の先生として渡ったとき、隊員の一人として参加されていた方だ。

募集時に開拓団の男性と結婚させることが目的であるとの話は一言もなかったと言う。「帰してくれ」と言っても叶わず、「お国のために」と自分を納得させて結婚。厳

しい冬に耐え、やっと作物が実り、収穫の時期となった7月、夫は現地招集され、8月9日にはソ連軍が南下してくる。

開拓団に残されたのは、女、子ども、年寄り。その日から、苦難の逃避行が始まる。着の身着のまま夏から厳寒の冬へ。映画に登場する同じ開拓団の女性は、おむつひとつないなかで出産し、そのまま捨て置いて歩きつづけるしかなかったと語る。妊娠5ヶ月だった栗原さんは、臨月になったとき、お腹の子どもを守るために、貧しい中国農民の妻になる。

「可愛さに養父は日々を貰い乳して育て

しという言葉もあらず」

当日、栗原さんが読んだ自作の短歌だ。夫に感謝し、帰国船に乗ることはできず、続いて3男2女が生まれ、必死に働きながらの生活を中国で送ることになる。

栗原さんが当時中学2年生だった次女の優子さんと20歳の長女を連れて帰国できたのは1980年。36年もの歳月が流れていた。帰国しても日本語が話せない姉妹には、差別と偏見に満ちた日々が始まる。「あの苦勞を乗り越えたから、今がいちばん幸せ」と語る栗原さん親子。一人でも多くの方に見てもらいたい映画だ。

●次回展示予定 7月16日(水)～9月28日(日)

ちひろと世界の絵本画家たち
—技法のひみつ—

ちひろの初期から晩年までの画風の変遷を追いながら、水彩や鉛筆、パステルなどの画材の特性をいかした、独自の技法を紹介いたします。あわせて、世界各国の絵本画家たちの作品を展示し、その画材や技法にも迫ります。



緑の幻想 1972年



アイスクリームを持つ赤い帽子の少女 1968年



エリック・カール(アメリカ) 「おんどり」1985年

東京館イベント予定

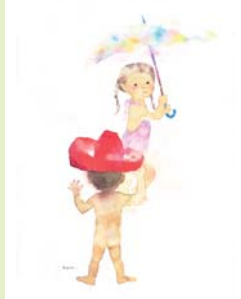
各イベントのお問合わせ・お申し込みは、ちひろ美術館・東京イベント係へ。
ちひろ美術館のHPからもお申込みできます。 <http://www.chihiro.jp/tokyo/event.html>
TEL03-3995-0612 FAX03-3995-0680 E-mail chihiro@gol.com

●ちひろの絵であなたも一句。俳句大募集！

「ちひろと俳句」展に関連し、みなさまからの俳句を募集します。

展示に出品されるちひろの絵（8作品）の中から、好きな絵を選んで、俳句を詠んでみませんか。投句方法は、ちひろ美術館のHP、またちひろ美術館・東京の図書室にある応募用紙に記入、「読み箱」に入れていただきます。

- お子さまから大人まで、どなたでも参加できます。
- 五・七・五の17音でつくり、また季節のことば＝「季語」をひとついれることが条件です。



日傘を持つ女の子と赤い帽子の男の子 1970年

応募頂いた俳句は、展示終了後に、審査をし、ちひろ美術館賞などを発表いたします。ミュージアムグッズや絵本など各賞に応じてプレゼントします。

○ちひろ美術館HP 投句ページアドレス
<http://www.chihiro.jp/tokyo/haiku/haiku.html>

●「ちひろ美術館コレクション展」関連トーク

ちひろ美術館コレクションについて話そう！

ちひろ美術館コレクションの蒐集に務めてきた松本猛が、作家との出会いや蒐集秘話などをお話します。参加者からのコレクションについてのご質問にも、お答えします。

- 講師：松本猛（安曇野ちひろ美術館館長・長野県信濃美術館館長）
- 日時：6月1日(日) 17:00～18:30
- 場所：図書室
- 参加費：無料
- 定員：60名（要予約・先着順）

●「ちひろと一茶」関連講座

一茶俳句の魅力とふるさと柏原

江戸を代表する俳人・小林一茶。一茶の故郷・信州柏原にある一茶記念館の学芸員・中村敦子氏が一茶の俳句の魅力を語ります。

- 講師：中村敦子（一茶記念館学芸員）
- 日時：6月14日(土) 16:00～17:30
- 場所：図書室
- 参加費：無料
- 定員：60名（要予約・先着順）

●7/21(月・祝) ロバの音楽座 「こどもワークショップ」と「愉快的コンサート」 多目的展示ホール

こどもワークショップ

「みんなでブーバクくんをつくらう！」

みんなで手作り楽器「ブーバクくん」をつくりましょう。どんな音がでるかお楽しみ。

- 時間：7月21日(月・祝) 14:00～15:30
- 参加費：ひとり500円 親子参加1000円(大人の入館料は別)
- 定員：35人(要予約・先着順)
- 対象：幼児から小学生低学年(お母さんと一緒可)
- 用意するもの：きれいに洗った牛乳パック(1ℓ) / ボタン1個(直径2センチくらいのもの)

愉快的コンサート♪

中世・ルネサンスの古楽器や空想楽器により子どもたちのために心温まる音の世界を創造し、大活躍の「ロバの音楽座」。幼児から大人までどなたでも楽しめるコンサートです。

- 時間：7月21日(月・祝) 17:00開場 17:30開演 19:00終了(予定)
- 参加費：一般2500円(入館料別) / 友の会2000円
- ワークショップと両方参加の場合 一般2500円(入館料別) / 友の会2000円
- 定員：100名(予定)(要予約・先着順)
- ロバの音楽座HPアドレス：<http://www.roba-house.com/>



●ギャラリートーク

毎月第1・3土曜日14:00より展示室にて、作品の解説や展示のみどころなどをお話しします。5月21日(水)、6月18日(水)は松本猛(安曇野ちひろ美術館館長)がお話しします(参加自由)。

●えほんのじかん

毎月第2・4土曜日11:00より展示や季節にあわせて、絵本の読み聞かせなどをおこないます(参加自由)。
*授乳室もご利用になれます

CONTENTS

ちひろと俳句／絵本どうぶつ百態……②③ ちひろ美術館・東京 活動報告 ちひろの絵本づくり／ちひろを語る……④
ひとことふたことみこと／美術館日記／窓……⑥

美術館／友の会だより No.158 発行2008年5月9日

ちひろ美術館・東京